

加村台から

流山市立博物館

TEL (7159) 3434

新指定文化財

旧割烹新川屋本館

令和4年1月1日付けで新たに旧割烹新川屋本館が、流山市指定有形文化財に指定されました。名称を聞いてどこ?と思われる方もいらつしやるのではないでしょうか。この建物は、利根運河のほとり、西深井にあるフランス料理のブラスリースリーしんかわの建物です。

新川屋は、明治25年(1892)に旅館料理屋として開業しました。現存する建物は、昭和8年(1933)に新築され、昭和17年(1942)に現在の場所に曳家され、その後数度の増改築が行われています。営業形態も旅館料理屋から割烹旅館、フランス料理屋と移り替わりながら、建物を維持してきました。

市では、流山本町と合わせて利根運河周辺を市の観光拠点として様々な施策を行っていく中で、この建物を買い取り、保存・整備しながら活用を図っていくことになりました。一方、博物館では、文化財としての価値を確認するため、数年にわたって、建物現況調査を行ってきました。この調査で、外観は数度の増改築によって当初の形状が変わっている部分がおおいものの、内部は利根運河に船が航行していた頃の形状がよく残っていることが、確認されました。このため、文化財として指定することになりました。利根運河関連の文化財として初めての指定です。今後は、一般利用ができる施設に整備する予定となっています。



新川屋 流山市有形文化財に指定

新川屋今昔物語

山本鉦太郎



新川屋遠望

流山で「新川」と言えば、町中の有名な新川呉服店と利根運河沿いの割烹新川の2カ所が思い出されるが、ともに今や新しくはなく、名だたる老舗である。そのひとつの割烹新川屋本館が、令和4年1月1日付けで、流山の有形文化財に指定されて、いま話題をよんでいる。

明治25年創業のとき、新川村にあったので新川屋と命名されたが、戦後昭和22年旅館新川と改名。でも流山の人たちは、今でも「新川屋」と呼んで親しんでいる。場所は、東武線運河駅で下車して、運河沿いに江戸川の方に向かって10分、左手の高台にある。

春、対岸から見れば長い塀が続き、サクラ並木があつてなんとも風情のあるながめである。

新川屋は、もとはもつと低い川べりにあつて、敷地は約3000坪ほど。当時はランプ生活でモミと呼ばれる赤い絹の裏地でランプのホヤを磨いたもの。待望の電気を通じたのは昭和3年であつた。

昭和13年運河の土手拡張かさ上げのため宿の移転が決まり、戦争中の17年、3カ月かけて高台に移動した。村じゅうからおおきな木白を借りてきて、斜面の段差に重ねて平らにし、その上を引っ張つたという。

・楚人冠と添田知道

戦前、店には三味線を弾いたり、唄を歌う女たちが何人もおり、夜ごと三弦の音が川面に鳴り響いた。近郷近在は言うにおよばず、遠く東京や市川、我孫子あたりからも大自然の美しさを求め、文人墨客たちが訪れた。

我孫子に住んでいた随筆家の杉村楚人冠もその1人であつた。昭和10年ごろ、流山に来てエビ釣りを楽しみ、手長エビを釣って、油

で揚げて食べた話は「アサヒグラフ」にも載つた。アサヒグラフを創刊したり、軽妙なエッセイや小説を書いた才人だつた。

そのほか随筆家の添田知道や詩人のおのちゆうこう、三越左千夫らも訪れており、添田は「利根川随歩」の中でこう書いている。

「春の水をガシヤガシヤと外輪船が掻き廻して行く。対岸は埼玉県見渡すところまつ平らな野だ。あしもとには土筆が群生している。焚火のわきでこんがり焦げた土筆を採って食つてみたりする。

船頭さんのゆつたりした動き。その船に干した赤んぼのもの。土手の上を行く馬士の腕組み、其のあとから随いてゆく車輪の音、家並みの間の桃の花。流山の町を歩いて行くのは、春の風ばかり。万物悉く春風に溶け込んでいる」

昭和初期の流山や利根運河、野田の様子がよく描かれ、貴重な文献である。

知道は、オツペケペー節を唄いながら社会主義を説いた添田嘸蟬あせせん坊の子として浅草に生まれた作家で、「小説教育者」や「演歌の明治大正史」は有名である。



新川屋の玄関

・名紀行「利根川随歩」

昭和49年斎書房より復刻された「利根川随歩」には新川で食事をするくんだり面白く書かれている。

「運河の駅のそばには、二、三軒の料亭があった。私たちはさらに闇の中を進んで新川屋に辿りつい

た。明るい座敷に座って、火鉢に手をかざして、ほっとした。

何ができるかと訊くと、女中はさしみに酔のものと言い出した。冗談ではない。鰻はないといふ。川魚料理の看板に詐りがあるのではないかと古川が息巻いたが、女中はケタケタと笑うばかりで取り合わないのである。運河でマグロが取れるのかと尚も古川がからんでいる。

ともあれそれで新米の入ったご飯を食べさせて貰うことになった。ありがたい、あたたかい飯にさえありつけば、何も言う事はない。

此の家へは、これで三度目である。こんな草深いところ物に食わせる家があるとは誰が考えよう。はじめて来た時は、如何にもものんびりの所が気に入った。その時も鰻を注文すると運河に浸してある網を上げてみて、二人前なら出来るというをかしさであった」

添田知道が倒れたのは

昭和55年で、大田区東馬込の家に私は私も何度かお見舞いにかがったがとうとう亡くなられた。

曲がつたことの大嫌いな、反骨の巨星ついに墜つという感じで私は悲しかった。病気が治ったら、流山で鰻を食べる約束がしてあったのである。

・特攻隊送別会

敗戦間近、柏十余二航空隊の若き特攻隊員たちは、みな流山の新川に集まって、最後の晩餐会を開いた。軍の許可を得て房総の網元から新鮮な魚を取り寄せ、甘いものも食べ放題。その日、死を前にして号泣する若者たちを見ていた人がいた。今は亡き新川屋の女主人石井綾子さんと、私はこの方から直接お話を伺った。

「軍の許可をもらって、外房の和田浦によく買い出しにいきましたねえ。艦載機に銃撃されてそりゃあ命がけ。壮行会の酒盛りには漆の杯を使っておりましたが、若い特攻隊の方々はその杯を欲しがりましてねえ。もし生きて帰ってこられたら、この杯を持ってまた新川屋で再会しよう、とよく言っ

ていましたが、ついにどなたも戻ってこられませんでした。

その夜、ご馳走が山ほど出ても食べる人は1人もおらず、上官が去るとみんな慟哭していました。皇国護持のため喜んで死んでいったなんて…。

送別会が終わると言っていましたよ。明日朝8時、この上を通過して出撃します。左右に翼をふつたら、ぼくだからね、と。

翌朝、私たち家族はみんな運河のほとりに立って、泣きながら手を振り続けました」

明治25年の創業以来さまざまな歴史を紡いできた新川屋は私たち博物館友の会とも縁が深く、記念すべき大きな行事やパーティーは皆新川屋のお世話になった。

ムルデル碑の除幕記念パーティーや北野道彦会長、羽根田光雄会長のお別れ会、会員の出版を祝う会など。そして文章講座の出張授業も新川屋の2階の大広間で行ったことがある。

これからいろいろな形で連帯出来たら嬉しい。

寺田園見世蔵は （株）流山ツーリズムデザインへ

先だって見世蔵の寺田英一さんが亡くなられた。見世蔵は寺田さん所有で、「万華鏡ギャラリー・寺田園茶舗見世蔵」として市民に親しまれていた。このほど流山市指定管理者の（株）流山ツーリズムデザインが買い上げたという。寺田家は流山6軒百姓の1軒で、旧流山の草分けの旧家であった。見世蔵は明治22年建築で、寺田家7代目の伊助によって建てられた黒漆喰磨仕上げの土蔵づくりで寄棟、瓦葺きの2階建てである。



寺田英一 画

昭和38年に堤防改修によって、店舗住宅は新県道へ移転したので、旧道の建物は物置になっていたが、平成22年にNPO法人によって寺田園茶舗として公開された。指定管理者は先年から（株）流山ツーリズムデザインが管理している。平成23年、国登録有形文化財に指定された。

寺田英一さんは絵を笹岡了一先生に師事。通運丸が江戸川を航行する絵は有名で、母親は野田から通運丸で嫁入りしたくらいだから、思い入れも感じられる。挿絵も寺田さんの筆で、昭和38年以前の生活を思い出した絵である。

さて、寺田園の2階は現在物置になっているが、『千葉県東葛飾郡誌』に江戸期に仙台公が江戸川改修をした「御用」の旗が残っていると出ているから、もしかしたら2階にあるかもと私は思う。

寺田さんは流山の生き字引だった。流山広小路の命名は「ましや」の喜左衛門だと教えてくれたし、旧通りが約1メートルの切り下げた時の様子も語ってくれた。流山本町にとって惜しい人をなくしてしまった。
（青木更吉）